第　214　号　　2013年1月15日

ジャパンクラブ NEWS LETTER

Japan Club : 1759 Sutter Street #203, San Francisco, CA 94115 • Tel: 415-931-9424 • www.jpnclub.org • jc-sf@sbcglobal.net

1月度理事会報告

明けましておめでとうございます
新しい年が皆様にとって良い年であります様祈ります

12日、午後1時よりジャパンクラブ事務所に於いて今年初の理事会が理事全員の出席のもと開かれました。今回は翌日に控えた「餅つき新年会」に議題を絞り、最終的な確認等を行ないました。その後全員で什器などを会場となる桑港寺まで運搬、そして引き続き新年会の下準備として、粕汁調理、餅米とぎ、会場の机等のは位置確認をしました。

2月の理事会は2月9日(土)サンマテオ榴木マーケット２階に於いて午後4時より開きますのでどうぞよろしくお願いします。

新年度の会費未納の方は1月31日迄に納めてください

2013年度の年会費が未納の方は1月31日までにジャパンクラブ宛お送りください。会計事務のスムースな処理の為にご協力ください。

新年会盛大に開かれる

会員、ゲスト合わせて58名もの参加で今年の新年会は開かれました、大隅副会長の司会で上野会長挨拶に続いて、ゲストとしてお招きした渡邊信裕新首席領事のご自身の紹介を含めたご挨拶をいただきました。

写真説明(写真提供:大隅副会長、事務局)
❶ 会場風景　❷ 秋山のすけさんによる獅子から福を授かる参加者
❸ 挨拶をされる上野正安会長　❹ 挨拶をされる新首席領事 渡邊信裕氏
❺ ニュースレター上で法律相談にお答えくださる鈴木淳司弁護士ご夫妻
❻福引きでみごと特賞(歌手、吉幾三のサイン入り色紙)を当て、大*喜びの青柳ジャスティン君(青柳伸之会員の息子さん)*

ありがとうございました

盛会だった新年会には多くの方々からのご協力、ご支援を戴きました。　又今年から始まった 参加者全員 に当たる福引きの景品は次の方々から戴きました。

- *米国宝酒造*
- *榴木マーケット*
- *大槻　悦子さん*
- *柏原　紀子さん*
- *下村　昌子さん*
- *福光　静子さん*
- *ウオルッシュ文子さん*
- *福田　光彦さん(サンフランシスコ幾三会)*

そして毎年会場を華やかに飾ってくださる生花は浦田葉子さんのご寄付によります。　福田光彦さん(幾三会)と秋山のすけさんからは多額のご寄付を戴きました。　この他にも色々ご寄付やお手伝いくださった方々にお礼申し上げます。

今年はいくつかの新しい試みのもとに新年会が開かれました、まず粕汁は前日夕方調理を済ませる(味もこの方が良くなる)餅つきは杵と臼によらず餅つき器を使用する、その代わり参加者全員に餅を丸める作業をお願いし、できたての餅の感触を楽しみ、そして味わっていただく。これにより今迄殆どテーブルについて一緒に楽しめなかったお手伝いの方々の負担を減らし参加者全員が楽しめる様になりました。さらに多くの方々からのご寄付により参加者全員に当たる福引きを計画、大いに盛り上がりました。これらの新しい試みを含め再度検討し更に素晴らしい新年会を目指します。秋山のすけさんによる獅子舞は新春の催しにふさわしく会場はとても華やいだ雰囲気に包まれました、そしてこの獅子は今年一年の安泰と健康を祈って参加者の間を細かく回ってくれました。

乞うご期待

久しぶりに復活
ジャパンクラブの日帰りバス旅行

バス旅行の案内

日時：５月２６日（日曜日）　（予定）
行き先：ジェームスタウン（シェラ山脈の麓にあるゴールドラッシュ時代の町並みがそのまま保存されている所）集合場所をサンフランシスコジャパンタウンとサンマテオの２カ所を予定、往復のバスの中も楽しく過ごせる様に企画します、現地での見物や食事についても調査中です。

ジャパンクラブ会員のひとりごと

この欄は会員の皆様に開放されたスペースです、貴方のこだわり、旅の想いで、専門的知識など皆さんに伝えたい事をスタイルにこだわらずお寄せください。文字数はおよそ1,000 字程度とし、毎月の締め切りは15日です。

母からの年始状

後藤　哲男

　此の年末年始二週間夫婦揃って夜遅く羽田到着のJALで里帰りした。私にとって今回の一時帰国は昨年７回忌を迎えた亡き母の家に残された遺品の整理すること、家内にとっては12月に癌の手術をした姉を見舞いと手助けをするのが主目的であった。空港から互いに別々の方向に向かう事となった。

　母は97歳で他界したが、73歳の時に父と死別、以来24年を一人で生活し続けた。元来健康で医者、病院嫌いの上、子供の世話になるのを好しとせず、最後迄その信念を貫き通した。

母は明治42年（1912年）名古屋の郊外で生まれた。物心つく頃から東京に憧れて居たらしく、人を介して当時東京で会社勤めをしていた父と結婚する為身寄りの居ない東京に嫁いできた。丹那トンネルは建設中で、静岡県沼津から富士山の麓の山北経由で国府津に出る長旅であったと言う。そして東京の郊外、荏原郡現在の品川／大田区エリアで、借家による所帯を持った。右も左も判らず、夜になると、下駄の下に潜む得体の知れない小さな動物の泣き声に怯えた話を子供の時によくきかされた。

　母は『主婦の友』を愛読書として居たが、そこで知った『赤本』を1940年頃購入し、それを生涯の必読書かつ熱烈な信奉者として手元に大事に持ち続けた。

余談になるが、『赤本』とは略称であり、正式名は『家庭に於ける実際看護の秘訣：副題—実地方面の養生手当と民間療法、女の衛生と子供の育て方』であって大正14年（1924年）発売以来現在までに一千万部をこえる隠れた大ベストセラーである。平成13年文芸春秋社の文春新書『赤本の世界—民間療法のバイブル』としも紹介されている。子供の頃,食当たりに罹ると『赤本梅肉エキス』を、胃腸の具合が良くないと言えば『げんのしょうこ』を煎じて飲まされた。扁桃腺に芋湿布、中耳炎には鰌療法など『赤本』記載の治療を受けた。いずれも効果てき面で、医者に罹った記憶を想いだすのに苦労する。今でも『梅肉エキス』『げのしょうこ』は我が家の常備薬として大切に保管している。

　整理の手始として、母が良く使っていた座敷の違い棚下にあった戸袋の中味に目を付けた。すると奥底に人目をはばかる様工夫を凝らして置かれた、すっかり色あせ古びた風呂敷包みが見つかった。結び目を解くと、昔銀行で正月に、貰った幅5センチ長さ10センチ程の手帳や、学習帳面が30冊ほど出て来た、どれもが母自筆の記録帳であった。達筆な文字とは言えないが、気性を表す様に、力強 い書体で、夫婦で海外旅行した時の感想、時事問題、　⇧

⇧　経済問題、レシピ、演歌歌詞、金銭忘備録などなど、どのページもぎっしり書き込まれていた。

それに２冊のパスポーポート、雑誌、新聞の切り抜きが出てきた。私は会社勤の3分の2以上を海外勤務していたので、全くこのような記録が残されていたなど、全く気ずきもしなかった。読み進むうちに胸にズッシリ刺さり込んできたのは、私を含めた子供達に対する不満や嘆き、悲しみ寂しさや、苦悩を赤裸裸な文言であちらこちらに書き付けてあった。それを目にする度に裁断の手がとまり、言いようの無い感情に、全身が締め付けられ、涙を禁じえなかった。

そして仏壇に置かれた母の遺影に向かってたびたび線香を手向けて両手を会わせた。暫くは心乱れて、作業が捗らなかった。

年末迄の裁断は予定を遥か遅れて、晦日も夜遅く迄整理に追われ『紅白歌会戦』を見過ごしてしまった。やがて東京湾に停泊中の船舶からの、闇をはって鈍く微かに響き聞こえる汽笛の音で新年が明けたのを知った。

　元旦は休養し翌日から帰る前日迄年末同様な時間を過ごした。複雑な思いを引き摺りながら記録帳を整理するのがやっとで、まだまだ整理する物が残ったままになってしまった。母が大切にしていた『赤本』は納戸の箪笥の上に、まだ置かれたままである。

70年程前に建築された家は容赦なく隙間風が忍び込んで、電気ストーブでは間にあわず、寒さに震えながらの裁断であったが、母が使用していた、木桶のガス風呂で毎晩首深く、暖かい湯につかり、至福に浸りながら床に着くことが出来た。

　アメリカに帰る深夜、家内とは羽田飛行場で落合い機上の人となった。

　今手許には、パスポートを取得の際使用した母の2種類の写真がある。一枚は和服姿、一枚は洋装のものである。忘れ得ない年の暮れ、新年となった。

『青春とは心の若さである。信念と希望にあふれ、勇気に満ちて日々に新たなる活動を続ける限り青春は永遠にその人の物である。松下幸之助』『今私の心は涙をもって拭うわれ、閉じ込めたる窓の辺りで力なく啜り泣く、舗道の馬車は行き交え度も、我が人生は有りや無しや』（誰かの詩の一部と思われる）『ヒューストンからラスベガスまで3時間。飛行機から眺めた山の色彩が大変美しい』

『人間の血管全部を繋げば9,600キロ。地球2回り半』（2廻り半は記載間違えか?）『———支店長様。後藤——（母の名）の通帳と印鑑を持って行きましても、お金を引き出さない様にお願い致します。親子と言っても出さないで下さい。私は心配しています。住所、氏名』（晩年記憶力衰え自身の銀行通帳を見失った時に書いた原稿と思われる。）

以上は母の記録の一部である。